

憲法のこころを歌に!
平和のうたごえを列島中に鳴り響かせよう!

2024年 第57回
日本のうたごえ全国協議会総会

2024年2月23日(金・祝)～24日(土)

サンメッセ鳥栖ホール

決 定 集

総会概要	1
はじめに	2
私たちをとりまく情勢	3
2023年度 活動のまとめ	6
① 青年のうたごえ	6
② 歌をつくり広げる活動	7
③ 合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典	8
④ うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」	9
⑤ 学習・教育活動	11
⑥ 組織建設・連帯活動	12
⑦ 事業・普及活動	12
⑧ 郷土のうたと踊り	13
⑨ 専門家及び他団体との協同連帯活動	13
⑩ 国際交流	13
2024年・活動方針	14
おわりに	17
2024年 主な日程・予定	18
2023年 表彰団体・個人一覧	18
2023年 入退会団体一覧	19

日本のうたごえ全国協議会

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36

TEL 03-3200-0106 FAX 03-3200-0193 E-MAIL info@utagoie.gr.jp

総会概要

●参加者 代議員 102人(定数156)、評議員 33人、オブザーバー 15人、オンライン9人、委任状41通、青年分科会でのオンライン含め総参加者 178人
○28都道府県、○5産業別、○2中央団体 事務局など 11人、

●開会挨拶・総会運営体制提案 舟橋幹雄(評議員・愛知)

●総会運営体制

議事運営委員 ◎舟橋幹雄(評議員・愛知)、田中嘉治(評議員・自治体)、轟志保子(評議員・東京)、三輪純永(評議員・うたごえ新聞社)、渡辺享則(評議員・長野)、大井かつ江(評議員・東京)

議長団 堤龍輔(評議員・福岡)、松田さえ子(代議員・佐賀)、朝倉久美子(評議員・兵庫)、池田ひろみ(代議員・大阪)

選挙管理委員 加藤実(代議員・愛知)、藤田由美子(代議員・東京)
資格審査委員 木村泉(評議員・山形)、成田美枝(代議員・北海道)

書記団 ◎三輪純永、石川道彦

事務局 ◎大井かつ江、小澤億和子(評議員・静岡)、杉浦幸子(評議員・医療)、石垣正人(事務局)、掛川貞省(奈良・代議員)、椎橋亨(東京・代議員)

プロジェクト&配信担当 時田裕二(評議員・音楽センター)、高島賢(評議員・北海道)

●祝電・メッセージ (順不同 23団体)

全国労働組合総連合、日本自治体労働組合総連合、日本国家公務員労働組合連合会、全日本教職員職員組合、郵政産業労働者ユニオン、全日本民主医療機関連合会、農民運動全国連合会、全国商工団体連合会、全

国生活と健康を守る会連合会、全日本年金者組合、子どもの権利・教育・文化全国センター、日本国民救援会中央本部、日本中国友好協会、日朝協会、明るい革新日本をめざす中央青年学生連絡会議、日本民主青年同盟、日本青年団協議会、新日本婦人の会中央本部、原水爆禁止日本協議会、安保破棄中央実行委員会、日本原水爆被害者団体協議会、平和・民主・革新の日本をめざす全国の会(革新懇)、新日本スポーツ連盟、

●報告・提案

◇2023年度活動のまとめ 轟志保子

◇2024年度活動方針提案 田中嘉治

●討論 発言 30人 通告 35件

●記念講演 野中宏樹さん

(日本パプテスト連盟鳥栖キリスト教会牧師・日本のうたごえ祭典in佐賀実行委員長)

●財政報告 うたごえ新聞・三輪純永

季刊「日本のうたごえ」、全国協議会・大井かつ江
会計監査報告・羽鳥茂

●討論のまとめ 渡辺享則

●採択 代議員定数156人

方針案・まとめ、決算・予算 圧倒的多数で採択

●役員選挙

常任委員会推薦候補にたいし信任投票

全員が圧倒的多数で信任

※選出された新役員

会長・田中嘉治

副会長・舟橋幹雄、三輪純永、渡辺享則

事務局長・轟志保子

事務局次長・大井かつ江

常任委員・青野一男、朝倉久美子、石川道彦、石垣潔、石垣正人、

北林亜弓、木村泉、桑田康徳、河野好行、今正秀、斉藤智子、清水

雅美、下温湯義和、杉浦幸子、高田龍治、高島賢、竹澤まみ、土屋

美和、堤龍輔、時田裕二、西本好道、八反田誠、藤村記一郎、松木

郁子、松永朝恵、真船光子、間部友哉、武藤佳子、森川恵美子、山

本恵造

会計監査・羽鳥茂、広瀬紀代美

●入・退会承認

●表彰

●新旧役員紹介と挨拶（各々※より挨拶）

新任・※八反田誠（埼玉）・※青野一男（静岡）（以上 常任委員）

退任・※小澤信和子（静岡）（以上 常任委員）

●閉会宣言 議長

第57回

日本のうたごえ全国協議会総会方針

はじめに

清々しい気持ちで新年を迎えるはずだった元日に、突如勃発した能登半島地震（最大震度7）で222人が亡くなった（1月15日現在）。翌日は、羽田空港でJALの旅客機と海上保安庁の飛行機による衝突事故が発生。海保機に乗っていた乗員6人のうち5人が死亡。JAL機の乗員乗客は全員助かったものの、機体は大炎上して、新年早々、2日連続して災害と事故の衝撃的なニュースが世界中を駆けめぐった。あらためて犠牲となられた方々のご冥福と、一日も早い被災地の復興と再生、事故原因の究明を願わずにはいられない。

1948年、敗戦の荒廃した国土の中で灯をともした「うたごえ運動」は、今日まで実に数えきれないほどの「いのちと平和」の五線と音符たちを紡いできた。昨年創立75周年を迎え、一昨年より10の記念事業を展開してきた。

①75周年記念日本のうたごえ祭典 in 北海道（以下、2023祭典・北海道）、②6人の音楽家による記念委嘱作品「スタートライン」の楽

譜出版と、③出版記念・作品発表とシンポジウム（200名参加）、④シンボルマークの作成、⑤運動75周年記念レセプション（150名参加）、⑥「日本政府に核兵器禁止条約への署名・批准を求める」うたごえ新聞意見広告（4751口達成）、⑦核廃絶のための1・22全国うたごえアクション（全国20カ所）、⑧日韓音楽交流25周年記念として2023祭典・北海道に56名を招聘、野外フェスティバルへの出演をはじめとしたうたごえでの交歓。

等のように記念事業の大部分を大きく成功させるなかで、今秋、佐賀で日本のうたごえ祭典 in 佐賀（以下、2024祭典・佐賀）が佐賀アリーナを主会場に開催される。荒木栄生誕100年や三大訴訟（有明、玄海原発、オスプレイ佐賀配備）をうたごえで綴る、佐賀・九州ならではの魅力あふれるプログラムを地元・全国で盛り上げていきたい。日本のうたごえ祭典の開催計画はつづいて、阪神淡路大震災30年、非核神戸方式制定50年、被爆・終戦80年の大きな節目となる2025年に神戸・ひょうご開催が既に決定し、準備を進めている。26年は長野での検討が始まっており、運動80周年記念祭典となる2028年は東京開催を視野に、同様の位置づけで行われる2027年は大阪での開催が昨年末、地元で決定された。

75周年記念事業をはじめ、日常的な運動の発展と前進を保障する、その原動力は、運動の根幹を成す組織建設（加盟組織・会員及びうたごえ新聞読者の拡大）にあることには言うまでもない。とりわけうたごえ運動の次代の担い手となる若い世代の参加が、現下の急務となつて久しいが、青年の願いや要求をくみ取り実現するには、いつでもどこでも青年を迎え入れることのできる場と機会をつくる体制が求められている。具体的にはうたごえやうたごえ喫茶を頻りに開催する中で青年や一般、高齢者も含めて、多くの人々との出会いの場を広げていく計画を遂行することも重要な普及活動と言える。

昨年来より、日本列島に激震が走っている。悪政の権化である安倍派（自民党）が引き起こした森友・加計疑惑に桜を見る会問題、そして裏

金疑惑。今年こそ自民党政治に終止符を打つため、私たちがうたごえも、「歌う日本国憲法請負人」として、いのちと暮らし、平和を守るため国民的大運動を盛り上げていかなければならない重要な年を迎えている。夢とロマンの創造を胸に、うたごえ運動75周年から80周年へ。夢の橋を架けるスタートラインの一步が今始まる。

「5つの止」運動をさらに盛り上げる希望の年に

私たちをとりまく情勢

いま、世界では、ロシアのウクライナ侵略やイスラエルのガザ攻撃などの戦争により多くの人命が奪われている。ロシアの核使用も辞さないとする威嚇の中で、「国連憲章を守れ。国際法を守れ。人殺しを直ちにやめよ」の世論を国内はもちろん国際世論にして世界平和の危機を乗り越えていくことが喫緊の課題となっている。さらに地球温暖化など地球環境の危機も顕著に表れてきており、戦争と地球環境の悪化、これらを複合的な原因とするエネルギー、食糧、経済危機等々かつてない人類の危機に私たちは直面している。

国内においても、憲法改悪の危機、諸物価高騰や医療費、介護保険料負担増による国民生活の危機が押し寄せている。そんな中での、「政治資金パーティー裏金疑惑」は、ついに安倍派の現職国会議員が逮捕される事態に発展、自民党は当該議員を即日除名したが、岸田首相は『大変遺憾』、信頼回復に努めたい』というだけで、真相の説明責任も放棄したまま。今回ばかりは閣僚の辞任や党の除名ですまされるものではない。強制捜査が入った安倍派、二階派だけでなく岸田派、麻生派も含めて全派閥に及んだ「政治資金パーティー裏金疑惑」は政府自民党の体質が元凶となつて引き起こされた組織的犯罪として糾弾されなければならない。政治の腐敗は、社会の腐敗に直結するものであり、いまこそ政治の刷新

が切に求められている。

9条守れの世論と運動を大きく広げよう

この様な情勢下で岸田政権は昨年末、2024年度政府予算案と「税制改正大綱」案を閣議決定した。「裏金疑惑」で政府自民党の腐敗政治の実態が暴かれるなかでの予算編成である。大企業優遇と無駄遣いの最たる軍拡のために、社会保障など生活関連予算は軒並み削減となり、安保3文書が閣議決定されて2年目となるも、軍事費は8兆円に迫る過去最大を更新した。さらに第2次安倍晋三政権発足の12年度から毎年前年度を上回り、10年連続で過去最大を更新している。その狙いは、集団的自衛権に攻撃力を充たす敵基地攻撃能力保有のための大軍拡であり、9条改憲への衝動が強まっている。岸田首相は、年頭会見で能登半島地震の甚大な被害が広がっている中で、今年9月（自民党総裁任期）までの改憲に強い意志を示した。日本維新の会などの補完勢力も災害に乗じて改憲策動を進めており、草の根からの「9条守れ」の世論と運動を大きく広げていくことが求められている。

核廃絶の大きな前進の年に

昨年、ニューヨークの国連本部で開催された核兵器禁止条約第2回締約国会議には、59の締約国と35カ国のオブザーバー、市民社会の代表122団体に参加し、うたごえも代表団として3人を派遣することができた。「軍事対軍事」「核対核」という緊迫した情勢の中で、禁止条約の存在意義の大きさ、世界の安全保障環境に影響を与えるだけでなく、「核のない世界」へ希望を託す会議として成功を収めた。日本政府は今回も参加を拒否、唯一の戦争被爆国の役割と責任を放棄し、世界から大きな批判と不信の声を浴びている。

加えて、日本政府は、昨年末の国連総会で禁止条約の促進決議に反対票（6年連続）を投じており、「核保有国と非核国の橋渡しをする」と言いながら、アメリカに追随する恥ずべき態度を取り続けている。

中満泉国連軍縮担当上級代表は、「核禁条約が核保有国の手をきつく縛

っている。G20の声明でも、核保有国がいても、核兵器の使用・威嚇は容認できないとの声明が出た」と禁止条約の今日的意義を話している。

「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」活動を全国で広げ、2024年を核廃絶の大きな前進の年にしよう。

辺野古新基地反対の声を全国に

昨年末、沖縄県名護市大浦湾側での工事設計変更の承認を、日本政府が代執行したことを受け、1月6日、米映画監督オリバー・ストーン氏やノーベル平和賞を受賞した平和活動家のマイルレッド・マグワイア氏をはじめとする世界各国の識者ら400人以上が建設に反対し中止を求める声明を連名で発表した。

声明は、「県民の大多数が反対しているにもかかわらず、辺野古埋め立てにこだわり続け、かけがえのない生態系を破壊している」として日米両政府を非難し、沖縄差別と軍事植民地化に終止符を打つよう呼びかけた。

地方自治法に基づき、国が自治体の事務を代執行するのは初めてで、1月12日から県が埋め立てを認めていない区域で工事が始まっている。国は、「普天間飛行場の一日も早い危険性の除去」を理由に、自治を侵害する強行手段に出たものである。裁判所は、国が法律を私物化し、地方自治体の自治権を踏みにじることを事実上認めたものであり、地方と国が対立した時に、国が一方的に国策を押しつける危うさをあらためて浮き彫りにした。玉城知事は判決を不服として即刻、最高裁へ上告したが、逆転勝訴するまで工事は止められない由々しき事態を迎えている。

沖縄の地方自治と辺野古新基地反対の民意を乱暴に踏みにじる岸田政権の暴挙に強く抗議するとともに、地方自治を破壊する新基地建設反対の声を歌・音楽で全国に広げることが重要になっている。

「地震大国」の日本を「原発ゼロ」に

能登半島地震で志賀原発（石川県志賀町）の使用済み核燃料貯蔵プールから水があふれ、一時的に冷却が停止したものの、北陸電力は「その

後、水位が維持され冷却に異常はない」と安全性を強調した。また、福島原発事故後、稼働停止中の新潟県柏崎刈羽原発でも、5基で地震の揺れによって使用済み核燃料貯蔵プールから水があふれるなど、周辺の原発に相次いで影響が出ている。一つ間違えば、使用済み核燃料は人が近づくと即死するほどの高線量の放射線を放出するため、これを保管するプールが壊れると、大惨事につながる危険性を常にはらんでいる。

最大の死者を出した珠洲市では、20年前に北陸、中部、関西の三つの電力会社が共同で原子力発電所の建設を計画したが、原発反対の市民運動のおかげで計画が凍結された。今回の震源は珠洲原発の建設予定地のすぐ近く、もしあの場所に原発があつたら重大事故が起きていたのは間違いない。

国や電力会社は福島原発事故を忘れ、原発再稼働・新設に固執しているが、元京都大学原子炉実験所助教の小出裕章氏は「原発ゼロでも電気は足りるうえに、何より原発が生み出した広島型原爆120万発に相当する放射性廃棄物の処理も決まっておらず、原発はただちに廃炉にすべき」と訴える。「地震大国」の日本に原発の再稼働や新設を許さず、「原発ゼロ」の声を歌でも広げていこう。

うたごえ発青年とシニア世代獲得のために

日本の高齢化は、量（高齢化率）、質（長寿化）、速さ（高齢化のスピード）全てにおいて、世界でも過去に例がない水準で進んでいると言われている。一方、少子化の問題も大きく、2008年頃から徐々に日本の人口は減少方向に進み、いずれは1億人を切るといわれている。人口が減少していくのとは対照的に、高齢者の割合は増加の一途をたどっている。今日、超高齢化社会をどのように構築するかは日本の大きな課題となっている。このような状況下で高齢者の余暇活動は賑々しい様相を呈している。特に60歳以上の高齢者の余暇活動の過ごし方（2016年総務省調査）を「学習・自己啓発・訓練」、「ボランティア活動」、「スポーツ」、「趣味・娯楽」、「旅行・行楽」ごとでみると、趣味・娯楽が最も高い結果となっている。いまや巷間では、高齢者をターゲットにした

文化産業の台頭が年々高まりつつある。その一角に「うたごえ」も大胆に斬り込んでいくプランが必要となるが、うたごえは歌を通じてシニア世代においても「ひとりぼっちの高齢者をなくす」ための多くの人々の「ふれあい」と「生きがい」を今日まで醸成してきている。

シニア世代の運動への参画と同時に若年世代への参画は一層困難を極めている。現代日本では、不安定な雇用や上がらない賃金のなかで、貧困に苦しむ若者が増えている。若者・子育て世代含む中高年は、子育て、高い教育費や住宅費の負担、親の介護など様々な重荷を背負わされており、経済的に結婚や出産を諦めなければならない状況が広がっている。

若者世代にどう運動に参加してもらうか、どう次期運動の担い手を育て、リーダーをつくるかは古くて新しい命題である。とは言え高齢者が比較的多い団体・グループに青年は簡単には集まってこない、リーダーも簡単につくれるものではない。「若者たちの要求にマッチした受け皿」や「リーダーを育てる仕組み」を創ることが重要なカギと言える。毎年開かれる「日本のうたごえ祭典」で数々のドラマを生み出している「うたごえ」は、そのパワーやエネルギーからも比類なき存在ではあるが、社会的な「存在」としてはまだまだ小さく、「明るい社会をめざし、いちと暮らしを豊かにさせる」ために、75年の蓄積を活かし、壮大な夢とロマンを持ち続けて一歩ずつ前進していきたい。

経済、社会、文化等々の領域にわたり、激変と言える情勢変化が、日々私たちのまわりで進行しつつある今日。あらためて「うたごえ」の課題、役割の原点に立ち返りながら、これらに対応できる運動75周年から80周年に向けた「ビジョン」が必要となる。

このビジョンはこれからの運動のあるべき指針となるものであるが、創造的音楽力量と組織建設力量の向上が不可分のテーマと言える。

日本の文化・芸術発展のために

新型コロナウイルス禍で、文化芸術は大きな打撃を受けた。人同士が密になる音楽や演劇、伝統芸能などは、公演の中止や入場者数制限が引き、活動が困難になった例は少なくない。外出自粛の中で合唱活動そ

のものが「不要不急」のレッテルを貼られる動きもあつた。英国経済学者のケインズは芸術は社会をより良くする可能性があり、公共性が高いとして芸術家を科学者や実業家の上位に位置づけている。さらに注目されたのがメルケル前独首相の演説で在任中に、「文化が表現するのは、私たちであり、私たちのアイデンティティだ」と訴え、その信念は、芸術家への緊急支援など手厚い施策となつて表れている。岸田文雄首相は就任後の所信表明演説の中で、地域の文化や芸術への支援強化に短く言及したに過ぎない。

昨年11月、参院予算委員会で、岸田首相は、「インバウンド需要拡大のために富裕層にとつて関心の高い現代アートを活用するという考え方は重要である」、すなわち「現代アートを『稼ぐ力』に活用する」という考え方が重要であると述べた。

全国388の美術館で構成する全国美術館会議はかつて、声明で「美術館が自ら直接的に市場への関与を目的とした活動を行うべきではない」「美術作品を良好な状態で保持、公開し、次世代へと伝えることが美術館に課せられた本来的な役割であり、収集に当たっては投資的な目的とは明確な一線を画さなければならぬ」と述べている。

音楽の世界では、ソーシャルメディア（SNS）等の登場により、私たちの生活は大きく変化してきている。音楽業界も影響を受けており、音楽のトレンドや視聴スタイルに変化が起きている。かつては多くのアーティストが音楽番組に出演し、それをきっかけにCDが売れていく時代であつたが、現在は、インターネット・SNSの普及により、誰でも気軽に音楽配信やプロモーションもできるようになつたうえ、YouTubeで満足してCDを買わない人も多くなつている。今やデジタル全盛の時代ではあるが、一方で興味があるものに対して「もっと生で見てみたい」「そのすごさを自分の目で確かめたい」というアナログ的な欲求も蔓延している。今、アーティストを含む音楽業界は、反応や空気感がすぐに反応として返ってくるリアルの魅力、ライブの価値をあらためて重視する動きも出てきている。音楽がもつ本来の役割や価値の大きな一つは、「人と人とのコミュニケーション」と言えるが、これは単に音楽領

域に関わらず全ての文化芸術活動にも言えることであり、「人が生きる」「人が交流できる」日本の文化芸術活動の発展のための国の施策を大いに求めたい。

しかし、日本の文化予算は、フランスの8分の1、韓国の12分の1と、あまりに貧困と言わざるを得ない。文化庁予算も2023年度で1077億円と少なく、2024年度予算の概算要求で8兆円近くもの軍事費を計上する一方で、国民のアイデンティティを高める文化庁予算は1千億円に抑え込んでいる。

「文化芸術立国」を言うのなら、文化予算の抜本的な増額こそ必要である。

政府は、経済効率優先でなく、国民が文化を創造し、享受する権利を保障する文化・芸術の支援に責任を果たすべきである。文化芸術の発展に力を尽くす政治への転換が強く求められる。

コロナ禍の制約が少しずつ解かれる中で、昨年の2023祭典・北海道の合唱発表会本選には257団体が出場し、ようやくコロナ以前の約290〜300の通常の数字を取り戻しつつある傾向を見せている。

大勢の仲間と共に思いっきり歌えることの欲びをあらためてかみしめることのできる「うたごえ」ならではの運動を今年も大いに盛り上げていこう。

2023年度 活動のまとめ

「1」青年のうたごえ

〈方針1〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、青年が主役となれる活動を計画し、次代を担う青年を迎える。

全国の青年サークルから「集まって練習が出来るようになってきた」と数多くの報告を受け、コロナ禍が緩和されたことを肌身に感じた。この勢いを2023年全国青年のうたごえ祭典 in えひめへと繋がられるよう、各サークルが例年にも増して一致団結し、全国青年の参加は100名を超えた。近年稀にみる大ホールを使用したことにより、歌い手の参加だけでなく、地元組織力が要求され、うたごえ外の団体と繋がることと求められた。地元青年サークルGLCが中心となって宣伝活動を行い、祭典成功に繋がった。特筆すべきは、地元障がい者ミュージカルのメンバーに呼びかけ、企画の充実を図ったこと。地元民青同盟の協力で新たにうたごえサークルが生まれたこと。祭典終了後もGLCはこの繋がり継続させ、活動の幅を広げることを模索している。

2023祭典・北海道では青年・保育・教育分野合同の大合唱となった。青年祭典と日程が近かったことや距離、金銭面で、青年の参加は45名と組織目標達成には至らなかった。が、3分野での合同は画期的であり、各団体が青年層の顔が見えた。この繋がりをいかし、青年層に拡げていくことが求められる。

2024祭典・佐賀に向けて、地元での青年向けうたごえ青年学生会部員が参加し、青年祭典と2023祭典・北海道に組織できたことは大きく、ひきつづき交流し、祭典組織に繋がりたい。2023祭典・北海道終了後の各サークルの活動に注力。長野のザ・イスカンドルは信濃のうたごえ祭典や団コンサートの組織を広げ、宮城の若星☆乙はクリスマスコンサートで故小林康浩氏の遺志を受け継ぎ音楽力を向上させた。

しかし、本格的に活動再開のサークルがある一方で、コロナ禍の影響により休団・活動停止状態のサークルもあり、全国・地元協議会とも連携を取りながら青年サークルの復活・増加につなげることが求められる。

「2」歌をつくり広げる活動

〈方針2〉大軍拡を許さず、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、コロナ感染防止、9条改憲に止めの「6つの止」

実現のための市民共闘と連携しながら憲法のこころを歌や音楽で広めよう。

〈方針3〉「共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくり」のうたごえを活発に広げる。

演奏普及活動

数年にわたるコロナ禍生活が一定程度落ち着き、旺盛な街頭活動、音楽会開催が行われた。ロシアのウクライナ侵攻やめよの行動は引続き取り組まれ、毎月欠かさずスタンディングを続けてきた三多摩青年合唱団は、その行動を通じて新しい音楽創造のつながりを広げている。また、10月のイスラエルによるガザ攻撃からは即時停戦の訴えを加え、戦争反対の街頭宣伝が各地で繰り広げられた。秋から年末にかけては演奏会やうたごえの開催が目白押しとなり、感染防止や会場条件などで制限されてきた音楽活動が一斉に開花した。

全国をつないだオンラインでのうたごえ会は4回(内1回は青年が担当)開催。各地の特色あるうたごえ活動が交流できた。また、YouTubeでも後日発信し、うたごえの楽しさを広めた。

「6つの止」の取り組み、他

憲法改悪・戦争法阻止については、「新しい戦前(タモリ氏発言)」に顕された危惧があり、力の入った取り組みが多く行われた。各地の憲法集会で演奏を行い、「こわしてはいけない！」の上演も神戸、長野で行われた。大阪では総がかり行動、埼玉ではオール埼玉行動など、協議会として大規模な取り組みも行われた。長野では6月の若者憲法集会(東京・有楽町)に地元実行委員会を結成して参加。また、ザ・イスカンドルが憲法を生かす学習会&コンサートを行うなど、若い世代の奮闘も見られた。

脱原発では、3・11アクションが神奈川、埼玉、東京、福井、長野、大阪、京都などで取り組まれ、浜岡原発再稼働反対ひまわり集会では静岡のうたごえが40人で演奏。2023祭典・北海道では脱原発プログラムで大間、福島のたたかいを発信した。原発事故に国の責任はないと

の最高裁判決に抗する取り組みとして4月「バックトゥザ・フリーちゃんⅡ」東京公演の準備が進んでいる。

核兵器禁止の取り組みは、核兵器禁止条約発効日の一斉行動から6・9行動など日常活動が、4年ぶりリアル開催のビキニデー、原水爆禁止世界大会へ、そして11月の核兵器禁止条約第2回締約国会議NY行動代表にうたごえ3名の代表派遣へとつながった。世界大会では広島のうたごえがG7サミットの核抑止力を正当化する「広島ビジョン」への怒り、被爆地からの思いを演奏。生協「虹のひろば」では「ぞうれっしや」：演奏に松井広島市長も加わった。メイン会場長崎は開会総会で中学校合唱部との演奏が実現した。平和行進も旺盛に取り組まれた。

沖縄辺野古新基地建設阻止は、工事変更承認を求め国が「代執行」を進め、県民の怒りがいっそう大きくなる中、大阪のちばりよく沖縄合唱団は毎月2回大阪平和委員会や安保破棄諸要求貫徹実行委員会の沖縄宣伝行動等に歌って参加し、署名に取り組んだ。憲法・文化で村づくりを進めた沖縄・読谷村を描くオラトリオ「鳳の花蔓」が5月に愛知で、12月に読谷村で上演された。

働く現場から「もう一人行進曲」が保育士の充実と良い保育を求める要求を広げ、保護者を含めた全国的運動の力となった。11年以上の闘いとなったJAL争議団は、CCU（日本航空キャビンクルーユニオン）が「勝利解決」を報告。引き続きたたかう選択をしたJHU（被解雇者労働組合）には支援行動が継続して各地で取り組まれた。

市民運動と連携した活動では大阪カジノあかん！、愛知のインボイスいらん宣伝、広島市立中央図書館移転反対運動、内灘基地反対闘争70周年などが取り組まれた。2024祭典開催地佐賀では、オスプレイ等配備反対決起集会はじめ佐賀の「三大訴訟」のたたかいを押し上げる日常活動が旺盛に行われている。

創作活動

創作活動は、全国創作講習会とオリジナルコンサート（以下、オリコン）を柱に進めているが、コロナ禍以降、オンラインツールの普及と研究によりトータル参加者は増え、運動は広がった。

新たな企画として5月に「第2回全国創作おしゃべり会（Zoomでのフリートーク）」を開催、約20人が参加。創作に向かう意欲と連帯感を育む機会となった。

オリコンは40曲（うち5曲が映像）の参加、全体のレベル向上との講評に加え、愛知、福井、北海道など「創作の盛んな地域で花開いてきている」との評も。

4年目となる全国創作センターには今年度79曲が寄せられ、全国の創作活動を励ましている。選考委員会で今年度推薦曲5曲等が選ばれた。季刊「日本のうたごえ」に伴奏譜つき楽譜掲載は好評。

全国創作講習会は、佐賀の三大訴訟―「オスプレイ配備反対」「玄海原発再稼働反対」「有明訴訟」の講演会を実施。3つのテーマが全国に繋がることを実感でき、翌日からの創作に好影響を与えた。講習会には32人が参加（ほか60人以上がオンライン参加）。オムニバス創作曲集「風の音符たち」の作者7名がそれぞれの創作体験を語り、「運動の機関車」7両「連結」が初めて実現。発表は21曲。メロディを予めHPに掲載し、講習会で詞を乗せるという「曲先」も実施。2024祭典の開催地佐賀から7人の参加もあり、祭典テーマソングも生まれた。また、Zoomを担うスタッフが九州、四国に広がった。

講習会から練り上げるZoom企画「あれからあの歌は」（1月6日）も定着。動画や音源で26曲を聴き合った。北海道や岡山の動画制作の質が高く、見ても楽しめるようになってきた。「勝利の朝を信じて」はJAL本社前で歌う130人の動画が流された。

産別では保育がリード。創作講習会を継続して行い、多くの曲を生み出している。「もう一人行進曲」は、戦後75年間変わらなかった保育士配置基準を変えざるを得ないところまで運動を牽引する歌となった。

戦争、大災害、国民無視の政治を前に、平和といのちのうたごえのうねりを創り出すうたごえ運動の役割はますます大きく、全国の創作活動がそこに応えられる質と量を生み出していくことが求められる。

「3」合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典

〈方針4〉合唱発表会を地方、産別、全国ともに活発にし、学び合い、創造の高まりをめざす。

〈方針5〉地方祭典の全都道府県の開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

合唱発表会

各地、産別の合唱発表会は、全国1093団体の参加で行われ、前年までと違い、コロナ感染対策をしながら、マスクなしで行われた。一方で前年度比、3県2産別で開催できなかった。ようやくコロナ禍を脱して全体としては参加団体が増えたが、活動休止、高齢化などによる参加団体減少の地域もあり、見逃せない状況もある。

2023祭典・北海道全国合唱発表会は、参加推薦枠を引き続き2019年度実績とし、結果、合唱発表会、オリコンに計257団体が参加。前年度13団体減、参加人数も約600人少なく、約1・5割減。北海道開催という地理的条件も考えられるが、あらためて新たな繋がり、参加を創り出す合唱発表会運動の広がり求められる。参加枠、開催方法の工夫など現状に合わせた検討が必要。

合唱発表会総評では、「コロナ禍からの解放感もあり、明らかに声が明るくなり、音楽の伝わり方が鮮明になったが、一方で音楽が届いてこない、活舌が悪くなっている」との指摘もある。演奏面では選曲と構成力、人数を活かした音楽づくり、個性、存在感、多様な表現、声を揃えることと届けきる力など、演奏の総合力が求められる。

編曲の節度、演奏時間によるカットなど著作権順守の対応が求められる。また、若い人を合唱団に迎える努力、一緒に演奏する工夫も強調された。

運営では、要員不足で支障をきたす一面もあった。出演団体の理解と協力とともに、適切な要員配置と專業化、開催地の役割なども検討。新しい団体に積極的に呼びかけ、豊かな交流ができる合唱発表会をつくり、県合唱発表会未開催県をなくす取り組みも必要である。

地方祭典、産別祭典

26府県4産別1地域1階層で祭典および交流会が開催された（報告数）。愛媛で開催の青年のうたごえ祭典は、地元の青年への呼びかけを広げ成功をおさめた。保育のうたごえ交流会（愛知）は4年ぶり開催、もう一人保育士を！の運動を発信。創作の力が生きた。地域では山形のうたごえ祭典が56回、信濃のうたごえ祭典が66回を迎えた。

75周年記念日本のうたごえ祭典 in 北海道（2023祭典・北海道）「いのち輝く大地から平和な未来（あした）を」を謳い、8月25日野外フェスティバル「大地のうた」、26日特別音楽会Ⅰ「平和に向かって」、Ⅱ「スタートライン」、テレビ塔うたごえの各企画、合唱発表会にのべ11000人がつどう祭典となった。開催地のたかいや自然をプログラムに織り込み、地元の音楽家や合唱団の協力、出演も多彩に行われた。75周年記念作品集「スタートライン」全6曲が全国の連帯と結集で演奏され、作曲家のみなさんのトーク、メッセージも節目にふさわしいものとなった。

日本のうたごえ祭典開催の長期計画を持つ 「はじめに」参照

「4」うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

〈方針6〉運動の魅力と人間的魅力が満載されている「うたごえ発信ジャーナル」としてのうたごえ新聞をいっそう輝かせ歌の広がりとともに読者を意識的に広げる。

うたごえ新聞は、「運動75周年をバネに会員拡大、うたごえ新聞読者拡大一大運動を」のもと、「読み」、「作り」（通信等）、「広げる」（読者拡大）を進めた。

〈次代を担う青年を迎える〉から青年の活動、ロシアのウクライナ、イスラエルのガザ侵攻即時停戦、核兵器禁止条約第2回締約国会議成功へ等周年で紹介。

「読み」運動づくりへ、紙面から学ぶ。各地の活動と共に専門家・識

者からの示唆。2023祭典in北海道成功へ11寺島一男大雪と石狩の自然を守る会代表、結城幸司アイヌアートプロジェクト代表、声楽家川島沙耶氏、馬頭琴奏者嵯峨治彦氏、横山直樹氏（合唱団『樹』指揮者）、THE GOUGE代表藤嶋美穂氏、同指揮者平田稔夫氏ら。日本国憲法をまもり活かす・核兵器廃絶へ11田中優子法政大学前総長、憲法学者清末愛砂氏、川田忠明日本平和委員会常任理事。伊東達也いわき訴訟原告団団長。高垣慶太、高橋悠太青年平和活動家。創造11上田假奈代氏（詩人）、平田オリザ氏（劇作家、兵庫県立芸術文化観光専門職大学学長）、小松康則大阪府関連職員労働組合執行委員長。町田浩志氏（「つながりあそび・うた」研究所。保育と文化）。75周年記念作品集「スタートライン」作曲6氏ら。

連載では、コールさとう氏「歌が照らす人と社会 歌う人間学」開始、好評。

「作り」（通信等）年間通信数1089通（2023年1月から12月。前年1120通）。前年を増す送稿と読者拡大の藤村記一郎さん（愛知）、愛知のうたごえの活動や時機を得た創作・運動で23本掲載。つづく箱崎作次さん、鈴木勝雄さん（東京）、河野好行さん（神奈川）も戦争反対地元での活動他。佐賀のうたごえはオスプレイ反対行動他精力的送稿。長野・田島由子さんの青年の取り組み、保育のうたごえの創作活動、広島の高田龍治さんと東京の原崇さんの「広島・セミパラチンスク合唱交流の旅」も特筆される。関西合唱団の山本則幸・北林亜弓両氏のインタビュ企画（上田假奈代、小松康則）も紙面充実に大きく貢献。

機関紙誌は489通。「くれっせんど」（関西合唱団）、「マルチャ」（北海道合唱団）、「竜頭蛇尾」（福井センター合唱団）は充実した内容。中でも「くれっせんど」は毎週発行で活動がよく伝わる。

「広げる」（読者拡大）

今年度読者拡大は全国28都道府県で729人。5月に組織活動者会議開催（東京）。読者拡大方針では「全加盟団体年間3人」のお願い目標を提起。達成は、北海道、静岡、滋賀、大阪、長崎5道府県。2桁以上拡大は、北海道、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、愛知、福井、滋賀、

京都、奈良、大阪、兵庫、広島、福岡、佐賀、長崎。総会以後の基数比10の府県は、千葉2、神奈川4、静岡5、滋賀4、大阪10、岡山2、山口1、福岡2、佐賀44、長崎9、熊本1。一方で前年比マイナスは17道府県。

大阪、東京、愛知、京都ではニュースを定期的に発行し、毎月協議会会議で現状と実践の交流が行われている。多くの読者をかかえる大阪は大幅な減紙を超える拡大で申請増に。また佐賀では2024日本のうたごえ祭典開催に向けて大幅な申請増を更新中。

5月の組織活動者会議で報告された「無料お試しキャンペーン」は、その後全国に飛び火し多くの成果が報告されている。機関紙などで読みどころの紹介や例会レッスンの読み合せ、投稿でより身近な新聞として活用が行われている。

季刊「日本のうたごえ」

No.199（2022）を発行。No.199は「うたごえ75周年から80周年へ」田中会長。「2022日本のうたごえ全国交流会in愛知」から質量ともにハイライトとなった青年のステージその背景。No.200は2023年総会特集号。川田忠明氏の記念講演と総会発言。75周年記念レセプションで特集。No.201は「75周年記念委嘱作品集『スタートライン』」特集。「スタートライン」作曲、池辺晋一郎氏の「作曲背景」と原詩・編集の寮美千子さんの講演。2023祭典よびかけ人清末愛砂さん（憲法学者）「国を超えた連帯で平和的生存権」。運動創始者関鑑子没50年に寄せて寄稿（木下そんき）。特にこの号は購読が進んだ。No.202「2023祭典in北海道を終えて」と田中会長「組織・うたごえ新聞読者拡大会議 基調」から。

毎号の石黒真知子氏の詩とエッセイ、楽譜紹介は好評。全国合唱発表会の演奏批評座談会等は今回も注目を集めた。また、見本誌配布も強力に取り組んだ。演奏創造・普及を学び合う上で、本誌の全会員購読への取り組み強化が求められる。

「5」学習・教育活動

〈方針7〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受け継ぎ、発展させる学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

各地の主な教育活動

全体として、コロナ禍から脱した活動が展開され始めた。愛知では、1昨年好評だった音楽評論家小村公次氏による講演会、2023祭典・北海道を視野に入れ、新実徳英氏の合唱講習会、愛知のうたごえSDGs5の方針からうたごえの若い仲間や身近な民主団体の青年担当の人たちの話を聞くなど「まなぼ企画」を4回開催。若者を迎えるために何が必要かを学ぶ機会とした。「指揮者講習会」「スタッフ講座」の再開。青年から要望のある「ア・カペラ講座」など計画中。

京都では、全国講習会に多く参加、初参加も増え、「内容の深さに充実感を覚えた」と次年度へ期待の声。また、協議会主催の講習会や各分野・サークルの公開練習も持たれ、学びあう活動が戻ってきた。昨年引き続き、山本高栄さん講師の楽しい声楽・合唱講座に78名が参加。歌い納めには今年創られた曲を発表交流し、「リアルタイムに音楽を発信する大切さ」を感じあった。

東京では、教育部会の体制を充実させ、東日本合唱講習会の準備、全国祭典合同出演組織と講習会の実施。愛知に学び「東京まなぼ企画」をスタート、「だれもが歌える街頭行動演奏講座」、講座後の6・9行動に歌い手参加。その他、合唱団練習見学（絹の道合唱団）を予定。今後は舞台スタッフ講座も。三多摩のうたごえ協議会では、志田陽子さん講演会「表現の自由2024」を計画。千葉は「75周年記念合唱団ちば」をつくり、2024合唱創作交流会に出席。メーデー・平和歌集の練習会も計画。

大阪は、2027年日本のうたごえ祭典開催検討に向けて「日本のうたごえ祭典の歴史」の学習会。また、「平和を考える講演とうたごえのつ

どい」を実施、講師に核政策を知りたい広島若者有権者の会共同代表田中美穂さんを迎え、「核廃絶の声を多世代に広げるために私たちにできること」を。関西合唱団は「うたのまなびや」を初心者含め15名で10月からスタート。また、日曜講座は八木寿子さんを講師に100名が参加。北部サークル協議会主催合唱講座は大阪府合唱連盟会長の清原浩斗さんを講師に。コロナ禍により、合唱発表会参加団体激減、高齢化の中、若い人たちが巻込んで復活へと2027年祭典開催に取り組む。

長野では、全国指揮・合唱指導講習会に意識的に合唱隊参加、県うたごえ学校夏の講座は信長貴富氏を講師に80名参加、2023祭典・北海道参加への弾みとした。2026年日本のうたごえ祭典開催を検討する会で2003年祭典・長野の録画を視聴。今年2月には新実徳英氏を招き、県うたごえ学校冬の講座開催。

全国講習会

西日本合唱講習会は5月に奈良・やまと郡山城ホールに227名が参加。東日本は神奈川・横浜情報文化センターと東京・ルミエール府中で開催し、108名が参加。共に75周年記念作品集「スタートライン」を取り上げた。西日本では作曲家新実徳英氏はじめ祭典合同曲の本番指揮者による講習で参加を広げた。また、詩人寮美千子さんの特別講座は、「スタートライン」の作詩に関わる受刑者のリアルな姿から感動を呼んだ。東日本は「スタートライン」から4曲を講習、3人の講師で作品の特徴を明らかにし、合同演奏の魅力を引き出した。

全国指揮・合唱指導講習会は4月に長野・松本市あがたの森文化会館で開催し、99名の参加。全国講習会のトップバッターとして、2023祭典・北海道での75周年記念作品「スタートライン」の全曲演奏に向けたスタートと位置付け、合唱特別講座には池辺晋一郎氏を講師に。合唱・指揮課題曲としても記念作品および祭典曲集から取り上げた。池辺氏の合唱講座は、作曲の意図、それをどう歌うかを徹底、作品に対する共感、表現の深さを感じさせた。理論講座、池辺氏と田中嘉治会長とのトーク形式での、詩を選ぶ観点と普遍性（共感）、音楽の果たす役割を感じさせて

濃い内容であった。指揮法講座では、今回も特別講師工藤俊幸氏の的確な指導、指摘は合唱隊参加者に深い示唆を与えた。工藤氏の指揮法は基礎的な習熟の必要性を強く感じさせた。初級コース(講師山本忠生)、基礎コース(講師渡辺享則)と合わせ、新たな参加者も次代に繋がるものとして大いに期待された。

日本のうたごえ合唱団2023は、112名で新春合宿からスタート。2023祭典・北海道では「星の旅人たち」初演、北海道のみなさんと「芦別の雪の中を」「平和の子守歌」合同演奏。芦別事件を闘った井尻光子さんのお話と共に感動的なステージとなった。

次代を担うリーダーの育成

うたごえ内から育つ指揮者が減少している。将来に向けて青年層の拡大と共に次代を担う指導者、指揮者の育成が課題。各講習会、全国的な活動に積極的に若者、新しいメンバーを送り出すとともに、共に活動する経験交流も必要である。

〔6〕組織建設・連帯活動

〈方針8〉サークル・合唱団をつくるとともに協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的にすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

今年度新加盟は、佐賀2、長野1、静岡1、愛知1、兵庫1、広島1、長崎1、の8団体。協議会の中で加盟団体が地域にサークルをつくり、会員を増やし、合唱発表会運動の繋がりの中で加盟に至ったケースなど、うたごえ運動の魅力とすすめる側との信頼関係が重要な要素。この熱い関係が加盟拡大の生命線。

佐賀では2024祭典・佐賀に向け加盟団体を増やしている。静岡、愛知では合唱発表会など長年のお付き合いから加盟に至った。長崎では

退会となった団体から新たにサークルを立ち上げて加盟に。一方、コロナ禍で活動縮小やサークル休止となり、退会となった団体もあった。(加盟団体は475団体)

会員拡大では、コロナが5類となり、練習や演奏会も旺盛に開催された。広報の活用や会館に宣伝ビラを置くなどの募集活動や講座の開設、若者の組織に広げるなど、新会員を迎えた団体等。しかし、高齢者にはコロナでの4年間のブランクは大きく、加盟団体は増えたが加盟人数では、前年を下回る結果となり、拡大対策が緊急の課題となっている。

関東、関西、九州では定期的にブロック会議を開催し、諸課題に対応した活動を展開している。東北ブロックもオンラインの活用で県の代表者会議を開催している。

職場のうたごえは、現役が少なくなり、職場にうたごえをどう継承させてゆくかが大きな課題となっている。

〔7〕事業・普及活動

〈方針9〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

制作と普及

コロナの状況も前年より落ち着き、イベント開催、物販規制も徐々になくなってきた。メーデーもオンラインを併用しつつ、通常開催が多かったことからメーデー歌集は「メーデー平和歌集」として発行・普及。保育の運動の中から生まれた「もう一人行進曲」を掲載し好評。「関鑑子の夢を訪ねて」の普及として、画期的な次世代トーク第2弾をオンラインで開催。

また、オンラインを活用して月1回定例の事業普及部会で交流し、「メーデー/平和歌集」、祭典歌集などの活用や普及状況など各地の経験交流が力となった。加盟団体の事業部担当を置き、事業部会にもより多くの担当者が参加できる工夫が求められる。

うたごえの出版物として全国発信できる出版方法として、ピース楽譜

を著作権登録し、オンデマンド形式で制作・販売する「ONE PIECE for P.A.C.E」をスタートし、活用され始めた。

楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめる、新たな層へのうたごえ普及へ。中断中の音楽センター出版物の楽譜ダウンロードは模索中。音楽センターYouTubeチャンネルの活用、発展も求められる。

〔8〕郷土のうたと踊り

〈方針10〉「郷土のうたと踊り」を旺盛に展開し、専門家との協力協同

全国講習会の充実、全国の活動の経験交流など活発にする。

2023祭典・北海道での全国郷土合同曲「風の太鼓」(作調三浦恒夫、東日本郷土実行委員会作調協力)を三浦氏を講師に4月、東西で講習会を開催した。東日本は、他に荒馬座講師に民舞「ソーラン節」で60名が参加。西日本は、塩原良氏を講師に民舞「八木節」「吉祥開運長熊手踊り」で開催、31名が参加。

講習会を成功させ、祭典本番では26名による「風の太鼓」が野外フェスティバル第2部オープニングを飾り、東京・関東は9月、第26回江戸やつこまつり(34団体607名参加)へ繋いだ。

各合唱団郷土部の活動では、調布狛江合唱団郷土部「跳鼓舞」が8月米国・アンカレッジでアラスカの友達太鼓、田楽座と田楽座の新曲「ハート・オブ・アラスカ」を50名で演奏。神戸市役所センター合唱団太鼓衆団輪田鼓は10月に第25回公演「江戸城無血開城」、12月には輪田鼓会・龍の輪会発表会を開催。11月に東日本郷土部の還暦越えメンバーが、「おお人生よ!和太鼓コンサート」を満員御礼で開催。東播センター合唱団民謡集団あらぐさは夏休み子ども和太鼓体験教室や地域まつりに出演し、6名が入会。団演奏会、地域フェスティバル等で和太鼓・民舞を広げた。こうした活動の中で専門家との協力協同が進んだ。

「全国郷土センター(仮称)」ネットワークづくりでは、全国郷土部のLineグループで経験交流、動画等による情報交換が進んだ。

〔9〕専門家及び専門団体との協同連帯活動

〈方針11〉専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう。

講習会および75周年記念2023祭典・北海道の企画の中で、合唱発表会講評を含め、地元の音楽家、演奏団体などとの新たなつながりを広げた。

〔10〕国際交流

〈方針12〉アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画をもつ。

日韓音楽交流25年の節目として、75周年記念2023祭典・北海道に韓国の合唱団(光州青い松合唱団、仁川市民文化芸術センター市民サークル連帯 文化の風、ハンギョレ統一文化財団 平和の木合唱団)を招聘。野外フェスティバルやテレビ塔うたう会の出演と日本のうたごえとの交流の場を持ち、連帯を深めた。

また、埼玉合唱団が韓国から招待され、演奏を行った。9月、全国から26名で結成「リメンバー合唱団」が、カザフスタン共和国との交流、「広島・セミパラチンスク合唱交流の旅」(音楽監督・高田龍治)を行った。核実験跡を視察、核被害の実際を見学し、現地の音楽家・音楽団体と合唱交流し、核兵器廃絶への想いを交換した。

憲法のこころを歌に！平和のうたごえを列島中に鳴り響かせよう！！
— 加盟拡大とうたごえ新聞読者を飛躍的に増やす大運動を創ろう —

2024年度・活動方針

方針（1）青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、青年が主役となるる活動を計画し、次代を担う青年を迎え、育てる。

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ。

②仲間やサークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③「2024全国青年&兵庫のうたごえ祭典 in K O B E」を青年のうたごえを活性化する場として、全国から青年を積極的に送り出し、「2024日本のうたごえ祭典 in 佐賀」につなげる。

方針（2）大軍拡を許さず、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、9条改憲政権に止（とど）めの「5つの止」実現のため市民共闘と連帯する。

①憲法のこころを歌や音楽で広めよう

②全国署名を旺盛に広げよう

・「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」を全国で取り組む。『6・9行動』はじめ全国各地で街頭宣伝等を行い歌や音楽で核

兵器廃絶をアピールする。

・岸田政権がねらう大軍拡・大増税に反対する「平和、いのち、くらしを壊す大軍拡、大増税に反対する請願署名」に取り組む。

③「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」事務局体制の今後の活動のあり方について検討する。

④辺野古新基地建設を断念させ、地位協定の抜本的な改定を強く求めていく沖縄県民のたたかいに連帯して、「沖縄を返せ！うたごえ大行動本部」を軸に全国でも沖縄支援の取り組みを強めるとともに「沖縄を返せ！うたごえ基金」に取り組む。

・創作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

⑤13年を迎える東日本大震災及び能登半島地震被災地の復興・再生への支援を継続し、全ての原発の再稼働を許さず原発ゼロの社会をめざす歌をつくり支援の輪を広げる。

方針（3）『共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくり』のうたごえを活発に広げる。

①合唱・器楽・和太鼓・民舞等多種多様な形態でうたごえを広げ、平和で健康なうたを普及する。

・全市区町村で多彩なうたごえ活動を展開し、創り歌い広げる普及活動を旺盛に展開する。

・全てのサークル・合唱団は職場にうたごえを届けサークルづくりの計画をもって実践する。

②全国各地で平和コンサートや地域原水協とも協力共同して平和うたごえ等を開催し、平和行進、世界大会につなげていく。

③みんなで創り歌う運動を広げ、新しい創り手を生み出し創作活動と作品交流を活発にする。

・「全国創作センター」の周知徹底ならびに創作活動の旺盛な展開を図る。

・全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させるとともに、全

全国各地でも講習会を開催する。

方針〈4〉合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏を聴き合い、講評を通じて交流し学び合う発表会の原点をいっそう輝かせる。

②参加を積極的に呼びかけるとともに、運営に工夫を凝らして豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

③合唱発表会参加団体を1600団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④合唱発表会の実施要領について小委員会をはじめとした検討会をもつ。

方針〈5〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画をもつ。

①うたごえを起こし、つながりを広げ、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域や都道府県単位、産業別・階層別の祭典開催や交流を活発にし、祭典運動の前進をめざす。

②「2024日本のうたごえ祭典 in 佐賀」を地元、全九州、全国の連帯で成功させる。

・2025年阪神淡路大震災30年、非核神戸方式制定50年、被爆・終戦80年の節目の年に日本のうたごえ祭典 in 神戸・ひょうごを11月22日〜11月24日に開催する。

③祭典プロジェクトで運動80周年以降の開催について検討する。

方針〈6〉運動の魅力と人間的魅力が満載されている、「うたごえ発ジャーナル」としてのうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる。

①「読み、作り、広げる」を合言葉に、紙面の中からたくさん運動財産を学び、創造、組織、普及の力にし、2024年目標を見据えた各県の計画、方針を具体化する。過去最高の読者数をめざす。

②規模の大小を問わず「うた新フォーラム」などの各地開催を計画する。

③通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をめざす。新読者を500人増やす。

方針〈7〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめる、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

①運動の歴史を引き継ぎ、日常の練習や活動の中で教育活動を重視する。批評活動や運動の理論学習をすすめる前進の力にしていく。

・うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「グレート・ラブ」、「うたごえは生きる力」、「関鑑子の夢を訪ねて」、対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」などを学習・教育活動に積極的に活用する。

②6人の音楽家による75周年記念作品の作品集を運動内外にわたり普及するとともに演奏の機会を積極的にもつ。

③1996年以降改訂されていない「教育テキスト」の改訂を検討する。

④各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。各協議会やブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワークづくりをすすめる。

⑤普及活動を旺盛に推し進めるため、オンライン、SNSを活用した取り組みを進め、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

⑥サークル・合唱団・協議会の次代を担うリーダーづくりの計画をも

つ。

⑦日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針〈8〉サークル・合唱団をつくるとともに協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的にすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

①サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。

②合唱発表会参加団体及び人数、協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やしていく。加盟団体500団体をめざす。

③協議会のない県の発足を計画的にすすめる。現在2団体が活動の県は今年度中の協議会結成をめざす。

④職場のうたごえの建設強化をはかる。

⑤2024年の全国組織活動・うたごえ新聞読者拡大会議を5月に愛知で開催する。

方針〈9〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

①普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

・6人の音楽家による75周年記念作品集「スタートライン」、**「関鑑子の夢を訪ねて」**を普及する。

・「**メーデー／平和歌集**」など楽譜、文献、CDなどを活用し、多くの人にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

・みんなうたごえ、うたごえ喫茶の活性化やうたごえ普及のために、サークル・合唱団の演奏活動と結んでCD、楽譜などの出版、普及活動に努める。

②サークル・合唱団に事業部担当をおき、経験を交流し合い事業普及活動を活発に進める。

③楽譜のネット配信など、インターネットの活用などで事業普及の力にする。

④(株)音楽センターの安定した経営のための支援を検討する。

方針〈10〉「郷土のうたと踊り」を旺盛に展開し、専門家との協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にする。

①東西郷土講習会を成功させる。

②全国の郷土活動、経験交流などを活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

③専門家・保存会との協力関係をすすめる。

④「全国郷土センター(仮称)」ネットワークづくりを検討する。

方針〈11〉専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざす。

①東・西日本での合唱講習会、松本での指揮者・指導者講習会を成功させる。

・各種合唱講習会、指揮者・指導者講習会など運動内外の専門家との協力共同をはかり、うたごえの創造的力をたかめる。

②平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針〈12〉アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画をもつ。

おわりに

30歳未満の若い世代（以下「U30世代」）男女5千人の政治意識調査（㈱日本総合研究所プロジェクトが2022年6月実施）によれば、選挙で投票すると回答した人が54・5%（選挙があることを知っている人は77・3%）、投票しない人の理由としては「選挙にあまり関心がないから」（32・6%）がトップ、「投票所に行くのが面倒だから」（27・9%）、「忙しい、時間がないから」（21・2%）と続いた。選挙に対して無力感を抱えている人も一定数存在する。

とりわけ、「自分の将来に漠然とした不安がある」（55・0%）、「国の政策には、国民の考えや意見が反映されていないと思う」（46・6%）と答えた人がかなりいることに注視したい。この結果、「少子高齢化の進展でU30世代が有権者に占める割合が低下し、投票率も他の世代に比べて低く、政治参加は進んでいない。今の日本の政治は彼らの声が反映されにくく、そのことが彼らを政治から一層遠ざける悪循環を生み出している」と同プロジェクトは分析している。

ロシアのウクライナ侵攻やガザの惨状を目の当たりにして、政治に無関心だった若者たちの中で、「徴兵」、「核使用」に対して忌避する声が渦巻いてきている。

昨年末、AI技術を駆使してビートルズが27年ぶりに新曲「ナウ・アンド・ゼン」を発表した。そのビートルズのジョン・レノンの楽曲「イマジン」には9条の精神が込められている。ジョンは「想像してごらん」と歌う。殺したり、殺されたりすることもない、みんなが平和に暮らしている。そんな世界の大切さを歌い上げたジョンは、凶弾に倒れたが歌は今も生き続けている。「イマジン」に耳を傾けながら、音楽の力を信じたい。

U30世代が希望を感じられる国になるには、彼ら自身の政治参加を

進めることが重要であるが、その新しい社会の在り方を考えるうえで、私たちがうたごえが、若者たちの声に耳を傾け、心に寄り添い、うたや音楽を通じて希望ある未来を共に描く運動へのよびかけがいま強く求められている。そして若者をはじめ世代を越えて大勢の人々とも歌や音楽で連帯しながら、今年も一年、大いにうたごえ運動を推し進めていこう。

◆2024年主な日程・予定

◎2024年うたごえの主な日程

日本のうたごえ祭典 in 佐賀 11/29 (金) ～12/1 (日)
東日本合唱講習会 5/25 (土) ～5/26 (日)
東日本郷土講習会 6/1 (土) ～6/2 (日)
西日本合唱講習会 5/18 (土) ～5/19 (日)
西日本郷土講習会 6/8 (土) ～6/9 (日)
全国指揮・合唱指導講習会 6/14 (金) ～6/16 (日)
創作の日 (オンライン) 5/5 (日)

◆2023年度表彰団体・個人一覽

表彰団体

【全国協・年間優秀団体】

☆最優秀団体
該当団体無し

☆優秀団体

- 北海道のうたごえ協議会 (北海道)
- 大阪のうたごえ協議会 (大阪)
- 佐賀のうたごえ協議会 (佐賀)

【うたごえ新聞】

☆ブルーペン賞

- 藤村記一郎 (愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団)

☆編集協力賞

- 箱崎作次 (東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団)

☆通信賞

- 竹澤まみ (東京・三多摩青年合唱団)
- 鈴木勝雄 (東京・調布狛江合唱団)
- 斉藤清巳 (福井・福井センター合唱団)
- 松永朝恵 (福井・敦賀保母うたサークルまつぼっくり)
- 佐賀のうたごえ協議会 (佐賀)
- 長崎のうたごえ協議会 (長崎)

☆機関紙誌賞

- 「マルチャ」 (北海道・北海道合唱団)
- 「竜頭蛇尾」 (福井・福井センター合唱団)
- 「くれっせんど」 (大阪・関西合唱団)

☆読者拡大賞 (団体)

- 大阪のうたごえ協議会 (大阪)
- 滋賀のうたごえ協議会 (滋賀)
- 佐賀のうたごえ協議会 (佐賀)
- 吹田おらが町コンサート合唱団 (大阪)

☆読者拡大賞 (個人)

- 藤村記一郎(愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団)
- 箱崎作次(東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団)
- 松島正行(大阪・北部センター合唱団)
- 西和子(大阪・うたごえサークルブーケ)
- 須藤智代子(京都・京都ひまわり合唱団)
- 鈴木勝雄(東京・調布狛江合唱団)
- 西本好行(兵庫・東播センター合唱団)
- 馬場功(滋賀・うたごえサークルたんぽぽ)
- 小澤僖和子(静岡・静岡合唱団なかま)
- 井藤綾子(東京・合唱団白樺)
- 山田千賀子(東京・合唱団北星)
- 下村信廣(佐賀・合唱団コールぼけっと)
- 壬生明美(埼玉・埼玉東部合唱団レインボー)
- 内田郁子(埼玉・埼玉東部合唱団レインボー)
- 松田さえ子(佐賀・女声合唱団パツンアパツン)
- 森川恵美子(長崎・新婦人コーラス花の輪)

【音楽センター】

☆ゴールドデンディスク賞

- 日本のうたごえ祭典 in 北海道実行委員会(北海道)

◆2023年入退会団体

入会団体

- 嬉野うたごえサークル(佐賀)
- 女声コーラスたんぽぽ(兵庫)
- うたごえ小組MIRRA(佐賀)

- コールヒゼンマユミ(長崎)
- 大口町おたまじやくし(愛知)
- 新婦人コーラス・クローバー(静岡)
- コーラス南信州(長野)
- コーラストタイム蔵王(広島)
- 呉・ロシア民謡を歌う会(広島)
- 大阪保育のうたごえサークルなのはな(大阪)

退会団体

- 三多摩保母じゃんけんぼん(東京)
- 合唱団サボテン(愛知)
- ワンダーランド(岐阜)
- 新婦人御室コーラス(京都)
- 宇治作業所ライブよつといで(京都)
- 山科年金者組合うたごえサークル(京都)
- 建設のうたごえサークル美シャンテ(京都)